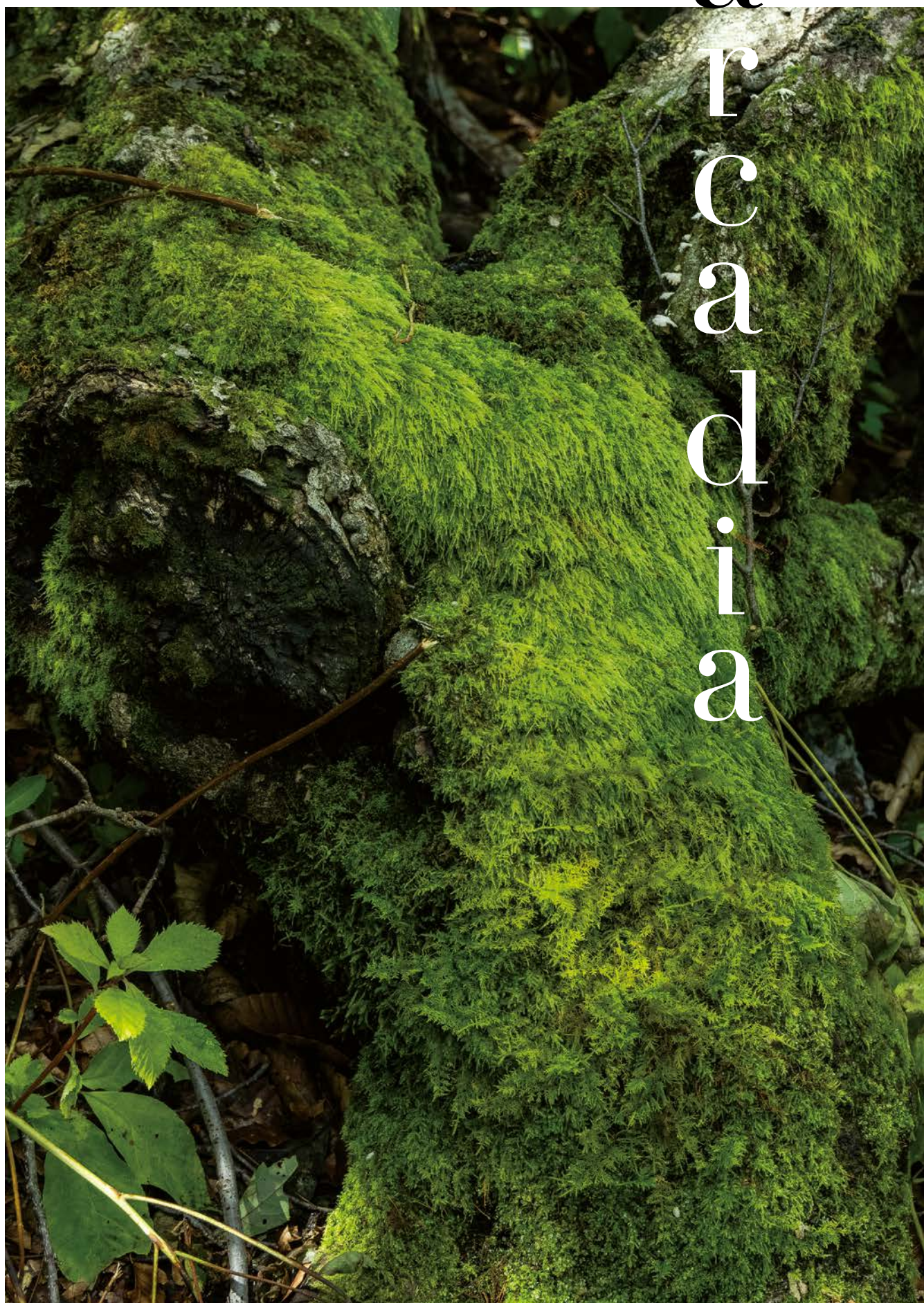


a r c a d i a



草木塔

崇高な自然を

愛おしみ、

感謝する心



Cover STORY

夏の日、登山道の傍に大きな木の幹が横たわっていた。
苔やキノコに覆われ、生命の息吹を感じる。
見上げると葉が無い折れた古木。
生命を育むため、自らが土に還ろうとしているのだ。
私たちはどうだろう。
地球から恵みをいただき何かを還せているのだろうか。

P02-P03：小国町温身平、生命の循環

CONTENTS

04 特集1 草木塔

自然と人間の共生
感謝と願いと畏敬の念

08 小国町の自然を楽しみ 癒しと活力で人生を満たす

やまがたアルカディア観光局

12 特集2 鶴の恩返し

思いやりと感謝
ご恩返しの精神を語り継ぐ

16 自然と調和して生きるために

循環型社会に寄与する企業・団体を紹介

18 2市3町フォトスポットマップ

ファインダー越しに見る
東洋のアルカディア

季刊誌「arcadia」編集部

だんだんと秋の気配が色濃くなり、秋晴れの中に風が心地よい季節となりました。
アルカディア地域は、実りの秋を迎えています。
「東洋のアルカディアを子どもたちへ」

これは、私たちやまがたアルカディア観光局のミッションです。

豊かなアルカディア地域の自然や文化を未来の子どもたちへつないでいきたいという想いから、このミッションを観光局に関わる仲間と一緒に考えました。

自然豊かなアルカディア地域に暮らしているながら、自然と深く関わる仕事をしていない限り、私たちが「自然との共生」を考える機会は減っているかもしれません。

しかし、おいしい水が飲めるのも、四季の移ろいを楽しむことができるのも、すべて豊かな自然やそれを支える人の働き、繋いできた文化があつてこそです。

今暮らしの中にあるすべてのことが、繋いでいかなければ当たり前ではなくなることを心に留め、今年の秋は感謝の気持ちを持っておいしく秋の味覚をいただきたいと思います。

山川草木

自然と人間の 共生



飯豊町の数馬沢わらび園から望む、雄大な飯豊山

一木一草に神性をみる 草木塔

日本の国土の7割近くを覆う森林。古来より山岳や樹木は、人々の信仰の対象として存在していた。置賜地域は内陸地の山間部にあり、南に吾妻・飯豊山地、北に朝日岳、白鷹山と、雄大な山々と人は常に共にあった。山から流れる川や、森林地帯での狩猟採集、鉾山から得られる恵みが人々の暮らしを長く支えてきたのである。それと同時に、厳しい自然環境や険しい地形は、ときに命を脅かし、畏敬の念を抱くとともに恐れの対象でもあった。そこで人々は、巨石や巨樹に注連縄（しめなわ）を張って神格性を持たせ、祀ることで安泰を願った。天と地を結ぶように高く伸びる樹木は神々の依代（よりしろ）であり、精霊、祖霊のすみかであり、人間の生命よりも遙かに長い時間を生きる、神聖なもの。そういった山岳信仰、樹木崇拜、アニミズムが身近に感じられる土壌が置賜地域にはあり、この土地に多く存在する「草木塔」にもその精神性をみることができる。



生命に感謝する心と 共同体の存在

草木塔は、採取した草木の命に感謝し、供養する気持ちから建立された石塔だ。「草木塔」「草木供養塔」「草木国土悉皆成仏」などの碑文のほか、経文、梵字が刻まれたものもある。大きさは50〜80センチメートルほどで、自然石が多い。日本国内で確認されているのは170基以上。そのうちの9割が山形県内にあり、置賜地域に集中している。最も古いものは、1780（安永9）年に建立され、米沢市田沢地区塩地平（しほだいら）に現存している。江戸大火により米沢藩の江戸屋敷が焼失した際、再建のため山林の木々が大量に伐採されたことに由来するという。以降、林業の盛んな地域、特に「木流し」の拠点に沿って分布している。

「木流し」とは、江戸時代から昭和初期まで続いていた木材の搬出方法で、山奥で伐採した木を雪面を滑らせて川辺まで運び、春の雪解けで増水した川の流れを利用し下流まで運ぶ作業である。

飯豊町指定文化財となっている、飯豊町中津川にある草木塔



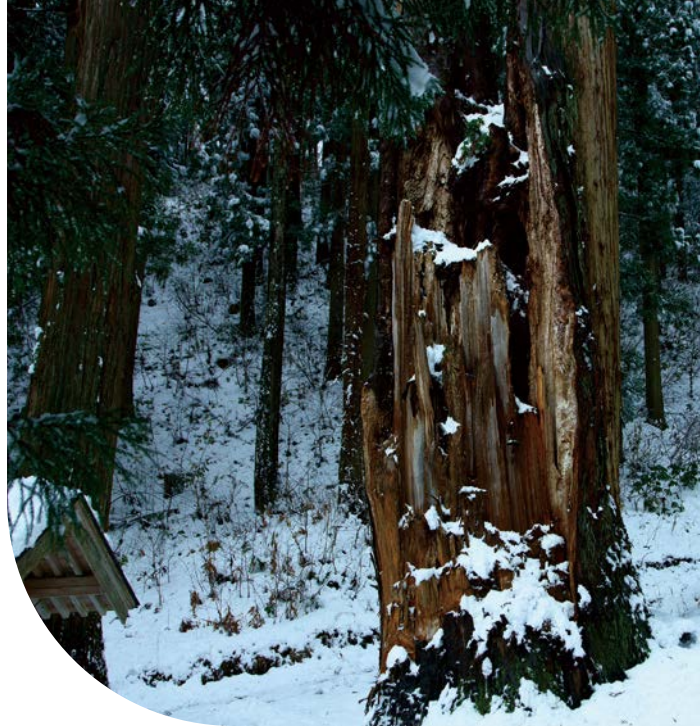
流送、陸揚げの過程では川に飛び込むこともあり、草木塔には過酷な山仕事の安全祈願も込められていた。江戸期に建立された草木塔34基の建立者をみてみると、村中または地名が記されているものが8基、講中3基、個人名3基、導師名2基、町方1基、記載なしが17基である。村中、講中など集落単位で草木塔信仰があったことは、当時の生活単位が大きく、山仕事をする共同体としての団結が強かったことが窺える。

人の暮らしと自然との共生を考える

白鷹町深山地区にある材木供養塔（1810、文化7年）、財木供養塔（1866、慶応2年）は、草木塔の数には数えられていない。しかし、人のための資材とする樹木に感謝と成育を願い供養する心は、草木塔と共通のものである。財木供養塔を建てた樋口金右工門は木挽き、材木供養塔の願主、弥五郎も山仕事や木流しに従事していたと伝わっている。

同じく白鷹町十王地区の五十峯家

草木塔に込めた感謝と願いと畏敬の念



は、代々山守役を続けてきた家系で、裏山一帯が上杉領地になっている。自宅の松の根元にある「草木供養塔」（1891、明治24年）を建立したのは五十峯惣吉。伐木を生業にしていた惣吉はある日、悪い病に罹ってしまった。生死の境を彷徨う惣吉が見たのは、走馬灯のように自分の周囲を巡る木々。これまで自分が切り倒してきた全ての樹木の姿に苛まれ、木々の霊を鎮めるよう草木供養塔の建立を願った。親が建碑を聞き入れると、間もなく惣吉は事切れたという。

初期の草木塔に刻まれる「草木国土

悉皆成仏」という願文は、『涅槃経』の「一切衆生悉有仏性」に由来した日本仏教の思想で、「草木や国土のように心をもたないものさえも、仏性をもっているので、ことごとく皆仏になる」と言う意味である。人と山川草木は同じ宇宙に在り、自然界で深く結び付いている。山の恵みをいただく人の、感謝や願いや畏敬や悼む心、人のさまざまな念は草木塔になり、自然の中に溶けているのだ。地球環境や自然保護の精神が見直されている現在、自然との共生に対する共感や認識を「草木塔」から捉え直してみたい。

P06 上段：白鷹町十王地区の五十峯家にある、草木供養塔
中段：背面に「明治二四年九月吉日」と建立日が刻まれている
下段：建立者五十峯惣吉の子孫で、五十峯征一氏
P07 上段：山奥で人知れず折れた大木
中段：倒木の幹に生えた苔が水を蓄え、新たな生命をつなぐ
下段：白鷹町深山地区にある材木供養塔

参考文献／
置賜民俗学会『草木塔の心をさぐる』
山形大学出版会『いのちをいただく』

MISSION

東洋のアルカディアを子どもたちへ

私たちは、この地に住む人、働く人、訪れる人とともに、精神的にも経済的にも幸福度の高い地域をつくりあげ、次世代につないでいく。

VISION

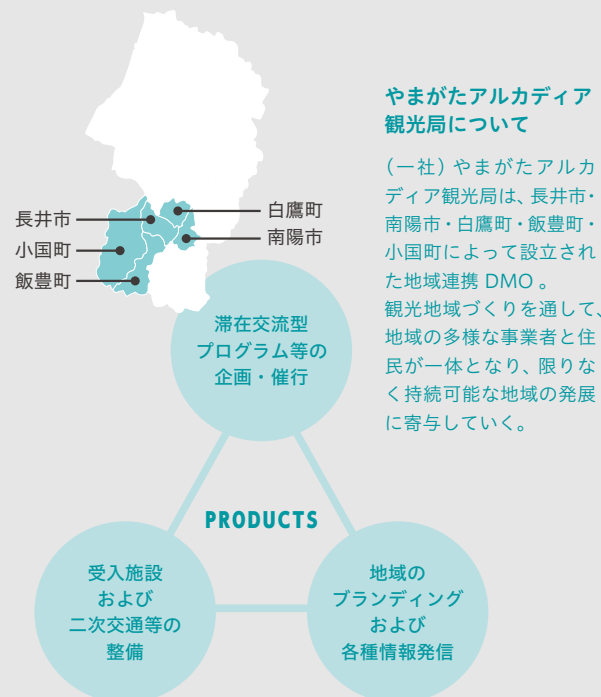
日本最強のローカル

豊かな風土、持続可能なコミュニティ、
いつでも帰れる、みんなを迎えられる心のふるさとやまがた

緑や花に囲まれた、美しい里山風景。人々が行き交い、まちは住まう人の笑顔に包まれ、活気に満ち溢れている。
住む人、働く人、訪れる人は、「東洋のアルカディア」と呼ばれるこの地に想いを馳せる。
この地に暮らすことを誇り、100年、はるか先まで続く「日本最強のローカル」を目指す。

BRAND CONCEPT

やまがたアルカディア～新たな自分に出逢える郷山～



PROFILE

村上 小百合(むらかみ・さゆり) 群馬県高崎市出身。おぐに白い森(株) 営業企画課主任。全米ヨガアライアンス (RYT200)、ヨガインストラクター。介護予防運動指導士。キッズダンス教室 PEAK 主宰。やまがたアルカディア観光局戦略会議にも参画。

のは勇氣が必要ですし、緊張もすると思うので、私たちがその扉を取っ払って「誰でもウェルカムです」という姿勢を見せていくようにしています。あとは、もっと町内の方が森林ヨガに参加して下さるといいですね。近すぎて魅力が伝わらないのか、山や川が近くにある環境にも関わらず、利用する大人が少ないのは残念に思います。

これから冬に向けての企画も考えています。小国町はアルカディア観光局に加入して日が浅く、まだ手探りの状態ですが、観光局と一緒にお手伝いできることはどんどんやっていきたいです。知らない人が「なにやってるんだろう?」と思わず振り返るくらい、自分たちが本気で楽しむ姿勢を大事にやっていきたいですね。

INFORMATION

見る・触れる・体験する!

やまがたアルカディア観光局では、置賜地方の豊かな風土と奥深い文化が感じられる、滞在交流型旅行商品を企画・提案しています。「東洋のアルカディア」を体験できる様々なプランをぜひご利用ください。



詳しくは
ツアー HP を
ご覧ください。



一般社団法人やまがたアルカディア観光局
〒993-0003 山形県長井市東町2番50号
TEL.0238-88-1831 FAX.0238-88-1812
<https://arcadia-kanko.jp/>



公式 HP



facebook



Instagram

自然を楽しむ
癒しと活力で
人生を満たす

村上小百合氏

(一社)やまがたアルカディア観光局
戦略会議委員



森林や川、あふれる自然が小国町の魅力
大人が本気で楽しむ姿が未来をつくる

小国町の観光事業、施設運営等を手がける「おぐに白い森株式会社」で営業企画を担当している、村上小百合さん。国際資格を持つヨガインストラクターであり、観光局の旅行商品「ブナの森リトリートツアー」では森林ヨガの指導を行っている。20代で大手スポーツ用品メーカーを退職。単身カナダに渡り、スポーツビジネス専門学校でスキープログラムを学んだ後、現地でアクティビティガイドを務めていた村上さんに、小国町の魅力と現在の活動について伺った。

―カナダから小国町に移住したきっかけは?

東日本大震災がひとつの契機でした。日本に戻ろうと考えたときに、夫の出身地である小国町なら、いいなと思いました。子育ての環境としても都会より適していますし、何より車で5分のところにスキー場があるのがよかったんです。冬季は町営の横根スキー場の運営管理をさせていただいていますが、30分でも時間があつたら滑りに行ってます(笑)。マウンテンバイクもサップもできますし、私

のライフスタイルは、カナダにいる頃とあまり変わっていません。

―ヨガ指導のやりがい?

町の人が元気に過ごしていければいいなと思っています。カナダではアスリートの街にいたので、強いヨガをやっていたんですね。それをそのまま小国町でやってみたら全くダメでした。あまり身体を動かしていない生徒さんが満足できる、寄り添う内容の教室が必要だと思い、介護予防運動指導士とシニアヨガの資格を取得しました。1時間教室に来て、身体だけでなく口だけ動かしただけ帰ったとしても、それはそれでいいんです。いかに楽しくやるかを大事にしています。

―森林ヨガなど、小国町の魅力を活かした素敵な企画もされていますね。反応はどうですか?

先日3名の方が参加されましたが、それぞれお一人ずつのお申し込みでした。全然知らない人がここで出会い、友達になったりするのはすごいなと思いました。一人で門を叩く



1月の朝日、凍った大地を照らす。

鶴の恩返し

思いやりと感謝

ご恩返しの精神を語り継ぐ

国に点在しているが、珍藏寺の開山縁起の伝承が最も古い記述とされている。

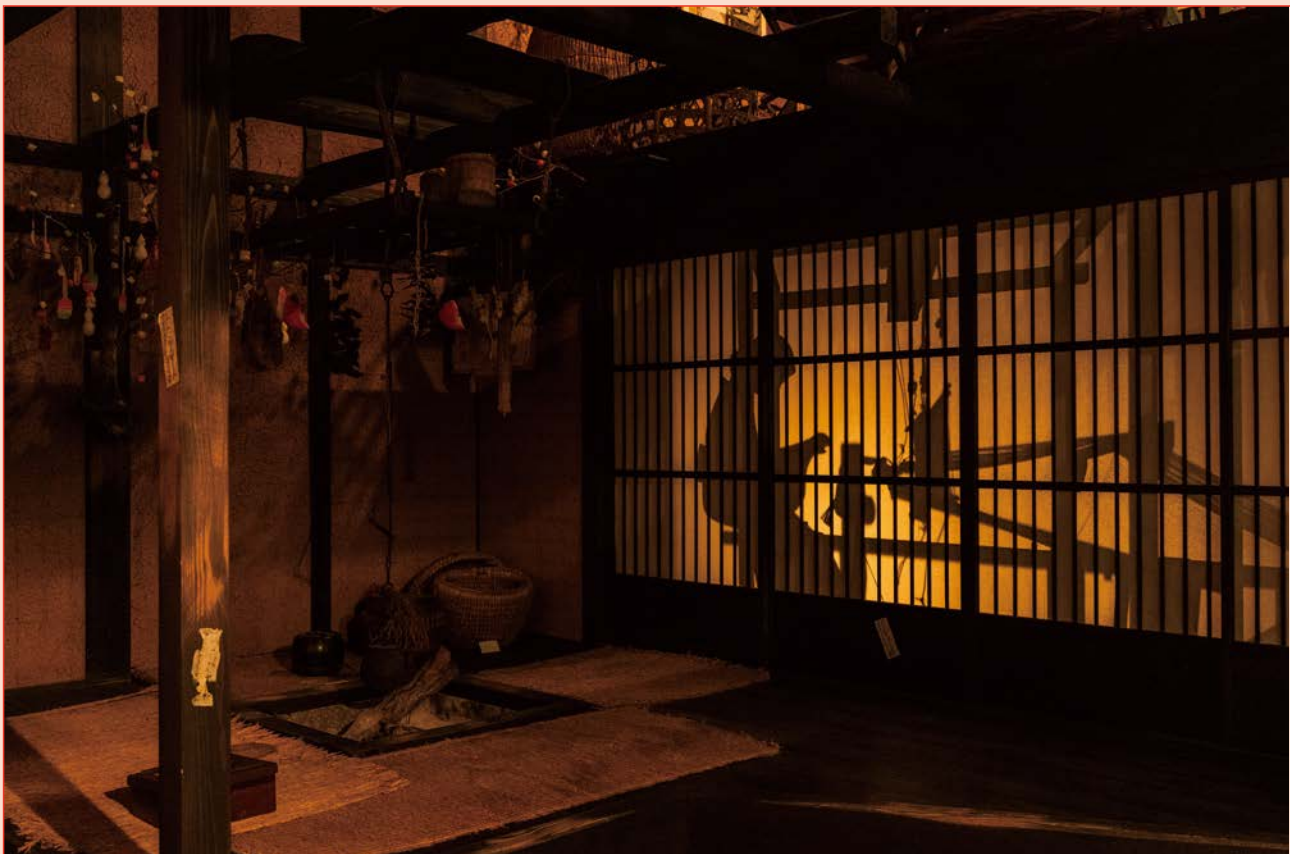
地域に紐付いた物語。

南陽市漆山にある鶴布山珍藏寺かくふさんぞうじは、仙台伊達家と縁の深い曹洞宗金剛山輪王寺・極堂宗三和尚きょくどうそうざんおしょうによって、1460（寛正元）年に開山されたと伝わる古刹こしかつである。上杉家代々の領主が訪れ厚遇した寺でもあり、米沢藩の地理や城郭、神社仏閣、旧跡などの縁起や概略を記録した『鶴城地名選』（小幡忠明、1804年）には、昔話「鶴の恩返し」とよく似た話が開山縁起として残されている。

昔話と大きく異なるのは、主人公の金蔵が鶴の機織り姿を目にしていないこと。妻となった女性が織物を残して消えたことで金蔵が出家したこと。鶴の毛織物が大変珍しいものとして寺の宝物になったこと。金蔵の名前から金蔵寺と名付けられた寺が、いつしか「珍藏寺」と呼ばれるようになったことなどが記されている点だ。副住職によると、宝物の織物は現存していないという。現在の本堂は1807（文化4）年に再建されたものであり、それ以前の火災で消失してしまった可能性がある。開山縁起に記されている通り、この場所にはもともと小さなお堂があり、それを開いたのが極堂宗三和尚なのではないか、という話である。「鶴の恩返し」のような話は、青森や新潟、岡山や鹿児島など全

南陽市が「鶴の恩返し」発祥の地と考えられている理由の一つに、鶴巻田つるまきた、織機川おりはがわ、羽付はつづきなど、鶴にまつわる地名が珍藏寺周辺に残っていることが挙げられる。また、かつてこの地は一面が湿地帯で鶴が飛来していたという言い伝えがあり、上杉家の御年譜に「1625（寛永2）年10月に鶴を一双、幕府に献上した」という記実がある。子ども向けの視聴覚教材『鶴の恩返し』を制作し、昭和59年度全国自作視聴覚教材コンクールで文部大臣賞を受賞した加藤正人氏は、「発祥の地が南陽市であることを意外にも市民の方があまり知らないで、少しでも広く見ていただけたらと思い制作しました。今見ても作品に込められた願いや想いは古い気がしません。思いやりと感謝、素晴らしいご恩返しの心は、今も昔も変わらないものです。後世に語り継いでいきたいですね」と語る。

作品は物語の謎解きを中核にしつつ、南陽市の風景、自然と調和する珍藏



「鶴の恩返し」の世界に入り込んだかのような趣きがある、夕鶴の里資料館。

語り部は土地の言葉と訛りで語る。民話の真髄を感じることができる。



寺、那須野浩氏による美しい挿絵で構成されている。そして、あたたかく柔らかな佐藤七衛門氏の語り、心に染み入るように情景を紡ぎ出していく。語りの冒頭を紹介したい。

むがすあつたけずまな。織機川のほとりこ新山に金蔵という正直で働きものいたけずま。
いづだったか隣の宮内さいった帰り道、別所前あたりのたんぼ道で、そこらの腕白やろこめら大きな鶴一羽足繩でしばっていつめったけずま。金蔵あもごせがって、あり金はだいて助けてけつちやずま。鶴あありがどうなんべんも頭さげて、金蔵の頭のうえっか大きく回って鶴巻田のほうさ飛んでいったずま。

あふれる情感を、土地の言葉で語り継ぐ。

昔話とは一般的に「昔むかし、あるところに……」というように、時代や場所、人物を不特定に語る架空の話であるが、南陽市で語り継がれている「鶴の恩返し」には具体的な地名が出てくる。『鶴城地名選』に出てくる地名は「漆山」「宮内」だけであることを考えると、民間で口頭伝承されるうちに現実の要素が加えられていったと考えられる。南陽市は米沢藩以来の養蚕地帯であり、明治時代には製糸業が地場産業となり海外貿易で栄えた歴史がある。鶴が飛来する環境で、江戸時代に絹糸を紡ぐ暮らしをしていた人々は、今よりずっと身近な調子で子どもに語り聞かせていたのではないだろうか。

文化施設「夕鶴の里」には、製紙工場の敷地内で使用されていたまゆ蔵を利用してつくられた「夕鶴の里資料館」があり、戯曲『夕鶴』の資料や、養蚕、繰り糸、織り、信仰、近代製糸に関する展示がされている。そして「語り部の館」では、地域に口伝えで残されてきた民話を土地の言葉で伝えるために、語り部たちが今も民話を語り継いでいる。

INFORMATION & MAP

夕鶴の里
〒992-0474 山形県南陽市漆山 2025-2
Tel/0238-47-5800
開館時間/9:00~16:30
定休日/月曜（祝日は開館）
<https://nanyo-bunka.jp/yuduru/ind>

珍藏寺
〒992-0474 山形県南陽市漆山 1747-1
Tel/0238-47-2264



加藤氏が東南置賜教育事務所時代に制作した作品の制作資料。



上：美しい庭園と紅葉の名所でもある珍藏寺。山門の桁には波の彫刻が施されている。
左：加藤正人氏（左）と武田俊孝副住職（右）。掛け軸の「舞鶴」は上杉鷹山公の書。
下：「鶴の恩返し」の場面が描かれている梵鐘「夕鶴之鐘」の音が里山に響く。



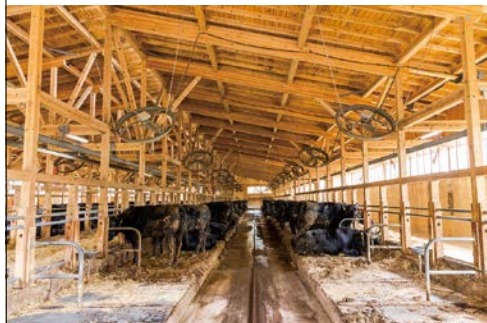
ながめやま バイオガス発電所

自然と共生する
循環型社会を拓く

日本三大和牛といわれる「米沢牛」の約4割を生産する飯豊町。肥育牛の排せつ量は1頭1日あたり30キロほどあり、堆肥化したとしてもその過程で出る臭気は大きな環境課題でした。そこで考えだされたのが、畜舎から直接、排せつ物を地下埋設のパイプラインでバイオガスプラントに搬入し、メタンガス化し発電・処理するシステムです。

肥育牛の排せつ物を使用する発電所は全国初。乳牛と比べてガス発生率が低く発電量が少ない部分をカバーするために、副原料として山形県産の米を使った菓子クズ、果物加工の残渣^{ざんさ}を使用。また、発酵残渣^{ざんさ}の固体は牛の敷料に再利用、液体は肥料として地域の人や農業高校に無償で配布し、地域に活力を生む資源循環社会を構築しています。

ながめやまバイオガス発電所
〒999-0605
山形県西置賜郡飯豊町添川
袋谷 3664-1
東北おひさま発電株式会社
〒993-0002
山形県長井市屋城町 7-1
Tel/0238-87-4157
(那須建設株式会社内)
Fax/0238-88-5244
<http://tohoku-ohisama.co.jp>



東北おひさま発電株式会社
代表取締役社長 後藤博信 氏

レインボープラン

土は生命のみなもと
台所と農業をつなぐ環

長井市の地域資源循環システム「レインボープラン」。市内5000世帯が生ごみを分別し、回収したものを農業廃棄物の粉殻^{もみガラ}や畜ふんと合わせて良質な堆肥にしています。堆肥を農地に還すことで土地が肥え、農作物が実り、市民の食卓には安全な認証農作物が並ぶというシステムです。

レインボープランの検討が始まったのは、1988年。土からの恵みを感じている人々が、農地を保全したいという気持ちから生まれた動きで、官民協働で1997年から本格始動しました。持続可能な社会のための確立したシステムですが、生ごみの回収量が減少している現状もあります。「自然に還す」気持ち^{きもち}が途絶えないよう、次世代が取り組みやすい仕組みづくりを模索しています。

レインボープラン推進協議会
〒993-0002
山形県長井市屋城町 1-40
Tel/0238-88-2601
Fax/0238-88-2601
<http://samidare.jp/rainbow/>



レインボープラン推進協議会
事務局 小林美和子 氏



SUSTAINABLE

自然と調和して生きる

循環型社会を目指す 企業・団体

自然環境、社会、人との深いつながりが
文化を醸成している、置賜地域。

豊かな自然を守り継ぐため、消費型の経済・社会から脱却し、
循環型社会の実現に取り組み発展している企業、団体があります。

有限会社 山形工房

自然の恵み 木の美しさ
伝統と現代的な技

競技用けん玉生産量日本一を誇る「山形工房」。室町時代から続く山守の家系で、初代社長は「木流し」をしていた鈴木与三郎氏。地元木材の美しさに惚れ込み、木地玩具・民芸品の製造メーカーを1973年に創業したことから歴史は始まっています。けん玉に使う木材は、桜、ブナ、楓など。現在は、裏山の木々だけでは賄えないものの、丈夫で質の良い国内産の木材を使用し、精度の高いけん玉を作り続けています。

創業者から続く「自然と共に生きてきた」という意識、恩恵に感謝する気持ちは強く、2018年からは植樹を実施。未来の子どもたちに木のけん玉を渡せるように、SNSを利用した植樹の企画や、木屑の再利用システムの構築などに積極的に取り組んでいます。

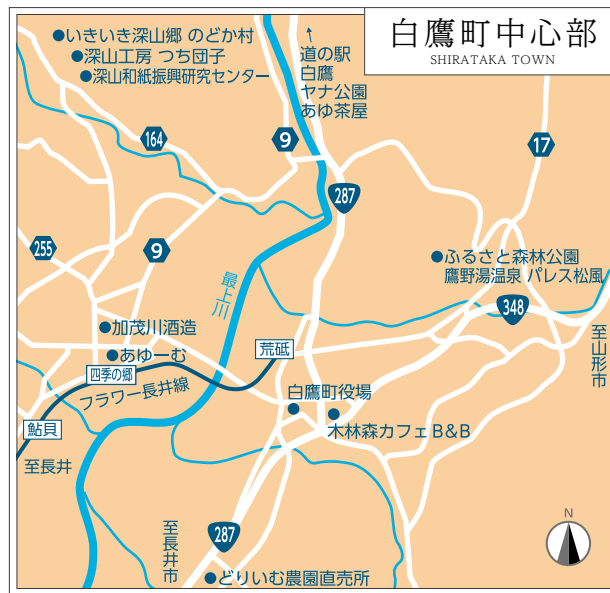
有限会社山形工房
〒993-0061
山形県長井市寺泉 6493-2
Tel/0238-84-6062
Fax/0238-84-6061
<https://www.kendama.co.jp/>



有限会社山形工房
代表取締役社長 梅津雄治 氏



市街地エリア MAP



arcadia 季刊誌アルカディア

#09 2021年10月発行(年4回発行)

発行／一般社団法人やまがたアルカディア観光局
 編集／株式会社やまがたアルカディア編集社
 写真／船山 裕紀
 文章／上林 晃子
 デザイン／坂井理枝子



next #10
WINTER issue

特集1_最上川舟運
 特集2_置賜伝承野菜



1 表紙：飯豊町岩倉
 川入切合登山口より登る
 (飯豊トンネル付近)
 撮影 date：2021年8月
 18日 午前11時50分頃



2 P02-03：小国町小玉川
 温身平にて
 撮影 date：2021年8月
 19日 正午頃



3 P05：飯豊町岩倉
 県道378号線沿いにて
 撮影 date：2021年8月
 18日 午前11時頃



4 P06：白鷹町十王
 五十峯様宅にて
 撮影 date：2021年8月
 24日 午前10時30分頃



5 P08：小国町小玉川
 温身平飯豊山荘
 撮影 date：2021年8月
 19日 午後1時頃



6 P10-11：長井市勸進代
 塩田養鯉場前にて
 撮影 date：2020年1月
 19日 午前7時20分頃



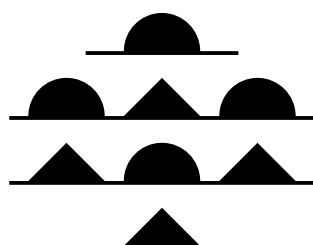
7 P14：南陽市漆山
 鶴布山珍蔵寺にて
 撮影 date：2020年11月
 4日 午後1時50分頃



8 裏表紙：長井市白兎
 置賜葉山登山道から
 撮影 date：2020年9月
 30日 午前5時20分頃



本誌に掲載されている
 写真の場所に行ってみませんか？
 そしてすこしの間だけスマホをしまつて
 イザベラ・バードが感じた
 美しい風景を眺めてみてください。



やまがた
アルカディア
観光局
YAMAGATA
ARCADIA
Tourism Bureau